國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕かつてチェルノヴィッツという街があった

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤野, 寛, Fujino, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000168

かつてチェルノヴィッツという街があった

藤野　寛

チェルノヴィッツのことを知ったのは、１９９３年夏、北イタリアのコモ湖畔にあるカデナビアで開かれたアデナウアー財団主催のゼミだった。ゼミのテーマは「ドイツ語で書く女性詩人」。ネリー・ザックスらと並んで、ローゼ・アウスレンダーという詩人が取り上げられたが、彼女がチェルノヴィッツを代表する女性詩人だった。講師の一人はアメリカ合衆国の大学で教えるドイツ文学者だったが、彼女の家族がもともとチェルノヴィッツ出身、ユダヤ系の人だった。

チェルノヴィッツはかつてオーストリア・ハンガリー帝国に属し、ドイツ語文化圏だったが、今ではルーマニア領だ、と語られた（実際にはそうではなかったのだが）。パウル・ツェランが生まれ育った街でもあった。

その後、チェルノヴィッツへの関心は私の中で消滅したも同然になっていたが、フロイトに魅せられ19世紀のオーストリアにおけるユダヤ人文化関連の文書を読み始める過程で、２０１０年頃だっただろうか、Czernowitz (Peter Rychlo (Hg), Klagenfurt 2004) という小さな本を手にし、そこに収められたカール・エーミール・フランツォースの「ウィーンからチェルノヴィッツへ」というエッセイを読んで、その関心が蘇り、のみならず一挙に膨れ上がることになった。そこには、チェルノヴィッツがブコヴィーナ州の州都に認められて１００周年の１８７５年、祝賀行事に招待されたフランツォースが、ウィーン北駅から15時間の汽車の旅をした経験がつづられていた。１５０年の後に同じ汽車の旅をしてみたい、という思いが私を捉えたのだ。

そのために色々な文書を読む過程で分かったことがある。チェルノヴィッツは、今ではウクライナに属する街なのだった。名前も、ウクライナ語でチェルニフツィ。というのも、オーストリア帝国の東の端に位置していたチェルノヴィッ

ツは、第一次世界大戦でオーストリア帝国が敗北し、多民族帝国からいくつもの民族国家が独立してゆく過程で、ルーマニアの支配下に置かれることになったのだが、第二次世界大戦中は、一時期再びドイツ・オーストリア領になり、しかし大戦終結後には、ソ連に併合されることになったのだった。そして、１９９１年、ソ連の崩壊、ウクライナの独立によって、自動的にウクライナに属する街になった。およそ１００年の間に、属する国が五度変わったことになる。

象徴的なジョークがある。チェルノヴィッツ出身のある男性がとある国のとあるカフェで同席になった人に「お国はどちらですか」と尋ねられ、「いやぁ、今日はまだ新聞を読んでいないので、分からないのですよ」と答えたというのである。

２０１２年と２０１３年の夏、私は、チェルノヴィッツを訪れた。ただし、フランツォースと同じ汽車の旅はできなかった。かつてはオーストリア帝国内の国内旅行だったのが、今では、チェコ・ポーランド、あるいはハンガリーを経由する国境を越える旅になっていた。（ウィーン北駅も名前が変わっていた。）乗り換えがあり、国境の検問があり、フランツォースの頃よりも長時間を要する旅になっていた。

チェルノヴィッツは、19世紀のドイツ・オーストリア文化の面影を色濃く留める美しい街だった。ウィーンのカフェに座っているような気分で時を過ごした。２０１４年のロシアによるクリミア半島侵攻前のウクライナは平和だった。

昨年2月24日のロシアによる軍事作戦の開始以来、ウクライナは戦時下にある。チェルノヴィッツは、国の南西の端近くに位置するので今のところ戦火を免れている。しかし、汽車で何度も乗り換えをしたリヴィフはそうではない。リヴィフも、かつてはオーストリア帝国に属する街で、レンベルクと呼ばれていた。ちなみに、リヴィフには二泊したが、そこの歌劇場で観たのは「カルメン」だった。

私には、チェルノヴィッツを多文化共生の理念と切り離して考えることはできない。歴史上、ユダヤ文化とドイツ・オーストリア文化の共生が最も実質的に実現していた街があるとすれば、チェルノヴィッツではないか。ウクライナという国についてもそうだ。今起こっているのがウクライナとロシアの戦争だとしても、オーストリア帝国とそこに花咲いたユダヤ文化に思いをはせることなくウクライナを考えることはできない。

（西洋近現代哲学・倫理学）